繪本通俗三國志

七編

六

へ21
221
66

東京帝國大學圖書館
於221
66

繪本通俗三國志七篇巻之六

目録

魏折長安美露盤
仲達奥兵定遼東
仲達謀殺曹爽

繪本通俗三國志七編卷之六

耦耕長安兼露盤二

後主劉禪。さとでゝ孔明を葬りて。朝廷へ回りくらせのゝち近臣奏ゝてやけるゝ只今辺官早馬を打て。呉の大將全琮数万の勢を調く。巴丘へ出よりと告来るゝ。後主ゝゝと聞て色を失ひ亟相近比亡びたるゝ呉ゝ攻来らべ。如何さぐきと宣へば將斑ゞ曰く。臣祢ぐかくる王平張嶷ホと。数万の勢をゝて永安城を守らん。陛下一人の使を呉ゝ遣し亟相の喪を告てそのゝを伺ひあるゝ後主ゝゝと従ひ誰をゝ使ゝせんと宣へば。一人をゝみ出て曰く。臣不才ゝゝとやせども。祢ぐかく呉ゝ使せん。此乃ち南陽安衆の人ゝ。參軍右中郎宗預字ゝ

徳艶ちう。蔣琬其の人ふうぐーと。奏ーけれた。後主詔を下ーて呉へ遣さ孫宗預直ゑ呉の金陵へ到り礼を施ーて孫権が左右をそろゑゑ近侍の人尽く喪の服を披たり。孫権ヤけるへ呉と蜀と八一家の交するゑ御辺が君あゑとて。永安城ゑ守の塹を添たる。宗預が曰く。臣おりへゑ東へ巴丘の守を添。西へ永安の塹を増。事の塹ひとゑ無り。何ぞおゑ真の俊傑ちう。昔日の鄧芝ゑ劣ぢとて。近くめーてヤけるへ朕あらとゑ孔明が亡びたるを支て毎日涙を流ー。諸葛瑾が一族ゑ孝を掛て。祭をおさしも左右のそのまでも尽く喪を発せーむ。方一魏の塹。其の蔭うのりて。蜀を攻んとを怕ゑ巴丘ゑ塹を添く守らーむおゑ同盟の好てのりてちう。宗預頓首ーて曰く。我國の天子。孔明があらたゑ亡びとるとて。臣ゑ命ドて喪を堅下ゑ奏ーいよく好をむすぶ上へ安んぜ義ゑ背くへ朕が子孫天の罰を被らんとべ。交をむすぶ上へ安んぜ義ゑ背くの理あらん若誓ゑ背てもせて喪を吊へむ。宗預ゑ呉へ遣されて成都へ赴り。後主ゑ奏ーてヤけるへ呉主孫権も。孔明あらんゑ亡びとる由を聞て。自ら涙をあゞー。諸葛瑾ホゑ孝をうけて。祭をおさーむ。魏の塹の虚ゑのりて蜀を攻んとて怕ゑ巴丘ゑ戍をて我國を援くいよく同盟の交をむすべん為ちう是故ゑ別ゑ使をゑせて。喪を吊へむ後主大へゑ喜び呉の使を。おー

蜀の宗預
呉國へ
ゆく

く持成て回らしや宗預をあつく賞して其後孔明ぶ
遺言ふ任せて蔣琬を丞相大将軍錄尚書事とし費禕
を尚書令として同く丞相の事を理させ吳懿を車騎将
軍として節を假て漢中を守らしむ姜維を輔漢将軍平
襄侯として諸葛の軍馬を總べて漢中ふ出さしむ魏の勢かてふせ
ぐ其餘諸将尽く封賞ありける楊儀ハ己が委用せられ
ざるを恨んで孔明五丈原ふ亡びるとひそかに我も諸軍を率
て魏ふ降らんと箇程さびしきものとと云けれ
るを近臣ふ告て密奏しけれぺ後主いてぎ蔣琬をや
て誅しめんとす蔣琬曰く。楊儀さへ魏延を孔明ふ説ん
魏延ふおひて已てとゝなだめて謀反せり是諸人の明ふ
ある所なり。今又治る言を吐出さゞ必ず國の禍をおこさん後
主いよく怒り獄ふ下して斬させ捨よと宣へぺ蔣琬が曰楊
儀いまだ罪ありとやせども。久しく孔明ふ従ひ功労あり是を
殺さゞふおのびく只官職を削さ百姓とおしの後ふおのれ
ふおこゝひ命ぜりを助けく。漢中の嘉郡ふ徙しもひけれぺ。
楊儀ハ是ふ恨ふ堪ず自ら首を刎て失ふけり。是より國中大
ふ治り。姜維兵粮を貯さく二十年の計をおひ乃ち蜀の建興
十三年ふあり時ふ魏の青龍三年。魏主曹叡ハ孔明をそう
死して吳蜀久しく兵を起さゞ國中さおひ靜ちりけれぺ司
馬懿を太尉ふ封じて各所の軍馬を總督させ自ら許昌ふ
あそびしく材木をあつめ多く宮殿を立さく三年を経

尽く成就て。又洛陽の朝陽殿。太極殿。總章觀と築き。倶に高さ十余丈ちり。又崇華殿。青霄閣。鳳凰樓。九龍池を造り。博士馬均といふものを奉行として。財用の費を厭はず。華麗を極さく。金玉を鏤め。雕梁。華棟。碧瓦。金磚。錦繍重々として光彩日に輝く。天下の巧匠三万余人。人夫三十余万を択んで晝夜を分ちときどき是て作らせ。若も便をはざれば。是をあるとたゝへ公卿太夫の土を荷はせ石をもおべーめけれぐ萬人の哭き已とをは司徒董尋が表て上りて諫めけれぐ曹叡怒りて攻死を怕ざるといふ近臣をお法の如て斬て棄べーと云けれぐ曹叡が曰く。朕もとより董尋が忠義て志あり。是を殺をはしのびず。官職を剥ぐ百姓とは重ねて諫るものあらぐ首を斬んとて。即時に董尋が官を剥とり。馬均をやーてやけるに。朕が建る。高臺峻閣。仙人と往来長生不老の術て求めんとおもふ。漢の武帝の建めひ。柏梁臺の事をきて曰く。陛下むかし漢の武帝の多くの宝や曹叡が曰く。朕いまだ祥ある事をきゝて詔ぢ馬均が曰く。漢朝二十四代の内。武帝のごとく國を保のもの又鼠ろくく壽も亦高し。天上日精月華の気を服し。長安の宮中に二ヶの盤を造さく。柏梁臺と名く。上は銅人を造りて手に二ヶの盤をさゝげ之を承露盤と号し。三更の時分に北斗の降せる沆瀣の水を承さく。天漿と名付。又甘露とも名付美玉を屑とし。調さく之を服さるとをゝへ。

自然と老たるも童となみ〳〵て百病を除くとや傳ぐ〳〵曹
操大に喜び汝行て美露盤をとり来るとく〳〵二万の人夫
て馬均と共に長安へ遣しける馬均夜と日に継ぐ〳〵せ下り。
柏梁臺の四方に材木を組上さく梯子〳〵縄をまて上に昇り。
五千の人夫に先銅人と金盤とを取下させんとせられば。たち
まち銅人潜然として涙を
俄に一陣の狂風吹起り。沙石を飛し石を走らし〳〵其烈き
事急雨の如く何ともせく。暁く音のきこえけるが天も崩と
地も裂ぐ〳〵。其ひびき四方にきこえて。銅の十囲あまりある圓
柱一度に倒れて。高さ三十余丈の墓とぐく崩〳〵人夫千余
人押れて打れて失にけり。馬均はひを火を付く墓を
焼せ。こぐ銅人金盤を取さく洛陽へ上り。右のおもむきを語けれ
ば曹叡が曰く。銅の柱は何にかあるあり。馬均が曰く。お重と百万斤
ありて。あるく〳〵動くともをりとも。銅の柱をとり
打砕いて。洛陽へ上せを是を
号して司馬門外に立させ。又銅の龍鳳を造り。龍は高さ四丈
ありて。鳳凰は三丈あまりこれをお是を殿前に立さく。上林苑の内に
は奇花異木。ひにしくあり。また珍禽怪獣をやしなひ。又美女千
余人をえらび集さく。其費こと民の膏血とぞ。ちりければ。少傅楊
阜表を上さく。これを諫む曹叡怒りて表奏を引破り。武士に
命じて楊阜を門外へ引出さんとせられば。自ら馬にのりて。上林苑に出ん
とて。太子舎人張茂字は彦林といふもの。髪を乱して身

紙銭をうけて。地に跪き表を上りければ曹叡ひらきこゝろ
に。又諫むる詞もうべ勃然として色を変じ。張茂を
只中書令ぞうう。何とて狂言を生して。朕を謗ぞとして。武士
に命じて首を斬りあけれべ張茂大に呼んで曰く。無道昏
君早晩ろならべ。敵の擒とあらんと。罵りく。卒に首をぞ
斬りける。曹叡その首を百官に志ぬ。又馬均に命じて。孫
高墓銅人を造らせ。禁裡の堺に大なる鼎をさんで。油を曰く
に沸えらせ。若諫むるものあらべ。烹殺さんとぞ。觸たりける。
百官これを怕ぢく。司馬懿に告けるべ。司馬懿が曰く。魏の
運已に尽たり。必ず諫むるとあらん之よりして諫るもの一人
もありけり。時に青龍五年改めて景初元年とぞ。皇后
毛氏もと河内の人ぞう。初め曹叡いまだ位に即ぬを。平原王
たりしと。甚ぢ毛氏を愛して。出入常に輦を同くせらべ。帝位に即く時に皇后
して。毛皇后に目をぢ向ぢ。日夜郭夫人と楽に眺り。
常に月を経ても宮を出ぢ。是歳の三月上林苑の内に百花
あらそひ開けて。春風興を催しけるべ。曹叡郭夫人と遊
ちん。華蕚樓に酒宴を設く。郭夫人問て曰く。天子
ちんで毛皇后をわして。共に花をこりんざる。曹叡が曰く。若
毛皇后を一目こんべ朕一滴の水も喉に入ことを得ぢとて。宮
女に命じて。四方を守らせ毛皇后をその辺へ寄ることあらん
朕こととちんせぢとて。郭夫人と遊びける。毛皇后へ月に

馬均長安へ赴き梁堇を拍ひくやく

馬均

あまたども曹叡が来らざるをあやしみ。ともあひ翠花樓の辺へ出て。此日十余人の宮女をの邑を聞く。さるに何の楽しみぞと問ふ。宮女答てさればよ御遊ありといひけるに毛皇后。郭夫人と。花見てありのみ。ふたりの内憂ひ悶へ宮中を回りて。次の日車を乗て園へ出けるが廻廊の辺にて。曹叡にし出合ひ昨日北園にての御遊さぞ楽しかりしと云けるに曹叡大に怒り。武士をやりて毛皇后を志め殺させ。相従宮女をも尽く殺して。幸ある郭夫人を皇后とぞ。其翌年春正月。長安より早馬きたり。幽州の刺史毋丘倹表を上りて。遼東の公孫淵謀反を起して。みづから燕王と称し。紹漢と年号を立て。おびただしく兵をあつめ。北國を動乱せんと。速に討手を下さるべき由。しきりに告けるに。曹叡大におどろき。群臣を集て計を

仲達奥兵定遼東

遼東の公孫淵。なかにも公孫度が孫。公孫康が子にあり。去ぬる。建安十二年。曹操をなかち袁尚を斬て。首を送上せける。曹操その恩賞う。公孫康を襄平侯に封ぜらる。其後太和二年。公孫淵を。公孫晃と云弟を公孫恭とぞ。きこえうて公孫康が弟。公孫恭その國を保ち。曹丕がとれる車騎将軍襄平侯に封ぜらる。其後太和二年。公孫淵を。

長ド。武力人ゝ絶ゝ。ゝ卒ゝ公孫瓚が位を奪けり。曹
操ゝ。ゝを揚烈將軍遼東の太守ゝ封ドけれゞ。呉の孫權ゝ
ゞ國の援とせんが為ゝ張彌許宴とゝゝものを使と。金銀
を送ゝ好をむすびゝ。孫瑜を燕王ゝ封ゝ。ゝれども魏を怕
る。のゝありけゝゞ。呉の使を殺ゝて。その首を魏ゝ送ゝ。曹
操ゝ。ゝを賞ゝ。大司馬樂浪侯ゝ封ドけれゞ。公孫瑜ゝ。ゝを
不足ゝゝ。諸將をあつめて。謀叉を企ゝ。自ら燕王と号
ゝて。紹漢ゝ年号を定む。とゝゝ曹操の諫ゝ曰
く。何とて浩る事を企のゝぞ。曹操の贈まふる官職尊ゝと
いゝゝあらゞ。然ゝ謀叉を呉ゝ。必ゞ大ゝる殃を招ゝん。況
や。司馬仲達ゝ。兵を用ひて。孔明ゞもお攻怕ゞたり。我國の
分とゝて。爭ふ中國ゝ敵をゞき。公孫瑜大ゝ怒り。賈範を
縛ゝて獄ゝ下ゝけゞゞ。賈範ゝ。ゝ
ゞ祠ゝゝとゝ理の當然ゝふ。聖人も禍福將ゝ善ゝ必ゞ先ゝ知
ゞ不善必先知之と宣へり。我國ゝゞ。ふゞぎの事あり。
君ゝんぞ察ゝゞる。近ゝ二匹の犬ありゝ。ゝ頭巾
をかぶき紅の衣を披て。人の屋ゝ入りて往來ゞ是一ゝの不
祥ふ。城南の百姓飯を炊ぎけるゝ。金の中ゝ一人小兒
の蒸たる死骸あり。是二ゝの不祥ふ。東ゝ市ゝ餓ゝ大ふる陷坑出來ふ。是三ゝの不祥ふ。内より死人の肉を出せり。太
さ二三尺。五体ゝとゝゝ備りふく。却ゝ手足ゝ。往來ゝ人
切ゞども。射ゞども。更ゝ透らゞ。何ものあらん。知人ふりー

史ト者ヲシテ占ハセケルニ形アリテ手足ちく〻口アリテ言ハヾ國家ヲ亡ンノミニアラズ形ヲアラハシテ浩ル形ヲアラハストゝ云リ。是三ツの不祥ちり。孔子も國家將興必有禎祥國家將亡必有妖孽ト云リ。七必有二妖孽一ノ人。今リ一謀反一のアルベシ必ズその身ヲ亡ボシ家ヲ破ルベシ。ト云ケレバ公孫瓚いよ〳〵怒り。卒ニ賈範倫直二人ヲ市ニ出シテ。首ヲ刎即時ニ斬ントいふものヲ大將トシテ。楊祚トいふものヲ先陣トシ一。十五万の勢ヲ起シテ。在〻所〻ニ火ヲ放ち。卿民ヲ掠ひやう〳〵是ヨリテ北國の騒動あらび。洛陽へ急ヲ告ることあき雪の飛ガごとくありけれバ。魏主曹叡大ニおどろき。司馬懿ヲやしテ計ヲ議スル。司馬懿ガ曰く。臣ガ手下ニ四万の勢あり。ウあらバ此賊ヲ退治ヲバ一。曹叡ガ曰く。卿ガ勢ヲ以るぐ〻と下り。如何シテ容易く平ゲん司馬懿ガ曰く。兵ヘ多ヲ用ひヾ奇ヲ設ケ。智ヲ用ひベシ公孫瓚ヲあらバ擒とあらん。臣ガ君の洪福ヨリテ一鼓ニ遼東ヲ平治ヲバ一。少モ御心ヲ苦しめ玉ハヾ曹叡ガ曰く朕いま卿ガ計ヲきうん。司馬懿ガ曰く。臣ガ為ニ圖ル二城ヲ弃テ豫め走ルヲ上計トし。遼東ヲ守リテ大軍ヲ拒ヲ中計トし。坐ラ襄平ヲ守リテ動ざるヲ下計トス。是ヲ以テ必ズ敵ヲ生捉ン曹叡ガ曰く三ツの計卿いづレヲヲ用ユベき司馬懿ガ曰く。公孫瓚ハ愚濁の匹夫いづくンゾ城ヲヲ料ン彼トヲ料ン彼ヲ破ルベし。公孫瓚ハ必ズ遼

東を守りて次ぎ襄平を守るべし安んぞ臣が慶る所ぞ坐ん曹叡が曰く卿いざ遼東へ下らば何をの日う都へ回らん。司馬懿が曰く。四千里の路あれば百日ぶうの國へ到り攻を百日回て。百日休息をること六十日此のごとくあるときは前後一年の内ぶへ事治ぶらん曹叡が曰く。若呉蜀より攻来らば如何せん司馬懿が曰く。臣さでぶ呉蜀を拒の計を定め置り。陛下ぶあらざど憂ひのぶる曹叡大ぶ喜びけれべ。司馬懿ぶろくの大将を伴ひ胡遵を先手の大将として。直ぶ遼東へ下りけり。公孫淵さの由をぎく。畢衍楊祚ぶ八万余騎を授け遼隧ぶ打て出て周二十余里ぶ陣屋を作り。壕を深ー。鹿角きびーく結ぐ守らーむ。先陣の大将胡遵

さの体をうそいそぎ司馬懿ぶ報じければ司馬懿笑ひて曰これ戦いざどーて。密く守り寄手を老さん為の計ろう。今若攻べ。敵の計ぶ中らん。推量をろぶ遼東の勢大半是ぶて守りたるらん然とをの其巣ぶあらざば。空虚あるべし。そのぶて打奔ぐ直ぶ襄平ぶ攻ぐらべ敵ぶまるらべ来救んぞのとを半途ぶ伏ぐ。是を破らべ十分ぶ打勝べてて尽く襄平をさーて進発さ遼東の大将畢衍まごーく守ぐ生ざりけるが。楊祚を呼ーてやけるぶ魏の勢なれ攻来るとも我ホあらざ戦べらざ彼まるぐーと四千里の路をきたり人多ーく粮足ざど。我ホ固く守りて月日を送べうぢ兵粮忽ちぶ尽て自ら乱ぶ去んぞのとた追打う

せべ尽く滅ぶ。昔司馬懿。漕水の陣を固く出て戦ふ
うべ孔明。果して兵粮尽て亡びぬ。今日よく此理を
合り我いざ司馬懿を生捉ん。孔明が為め仇を報ぜんと
て。弥固くきびしく守る。ある人侯の兵走り来り寄手乃
営。去の不を打奔さ。山路より南をさして進んだりと告
けるに。早衍おどろひて曰く。彼をでゞ味方襄平の虚ある
ぞ。此を打ては。却さ後へ回り襄平を破るべ
べ。我ホ一日も生るてあこいぞ。早く行く救ふとて。陣屋を
収めて打立ける。司馬懿いよ〳〵勇て。千余人の兵を土民のぶ
とく出立せ。ある〳〵の残し止めて。敵の様子を伺はせける。遼
東の営。陣屋を収めて。襄平を救と告けるべ司馬懿あ

ざ笑ひて曰く。我計を生ぜ。復た
伏さ。此のごとく計を用ひよと。下知ーけれべ三人。計を受て出
ふけり。案のごとく遼東の営。襄平て救ふとて。清水の辺まで
来けれべ。忽然として鉄砲ひびき。鼓を打哄て造さ。魏の伏兵
尽く起り。左ふ夏侯覇。右ふ夏侯威三人ふ清水の辺ふ
ろ。早衍。楊祚大ふおどろき一支も支ず襄平ざして走り
けれべ。又向より司馬懿。みづから計て出。三方より囲けれべ。
遼東の営。討るゝもの枚て志らず。降るもの大半ふ及べり。早
衍楊祚へ命ざて。這ふ囲を出首山の麓まで走ける
ふ公孫淵大営を引さて来りけるべ一手ふまりて敵を待
ふ。魏の営続く追蒐ーふ早衍馬て出ーて大音あげ。汝ホ

遼東の田家に奇怪ありて不祥を示す

魏の逆賊いかりの計を休く。分明ゝ勝負を決せよとよべ
ゝりけるゝ魏の陣より夏侯覇馬をとゞせ出ゝ戦ニ三合ゝ
して一刀ゝ斬さ落を。遼東の勢おどろき怕まどく。色めき立
たるとゝて。魏の勢ゝ喚さ蒐なりくゝべ公孫淵さんぐゝの乱さ
さ。襄平の城ゝ囲箸る。魏の勢四方ゝ囲んで。日夜攻まども
も要害堅固ゝして更ゝ落ざ時秋の半ゝいりて霖雨一
月ゝあまり。平地水深きこと三尺さの故ゝ兵粮を運ぶ舟
も。遼河より直ゝ城下まで来る。魏の勢おゝ水中ゝあり
て。患ひ苦ゝざるものなく。戦心ありくゝべ都督裴景と云
もの司馬懿ゝ告さくやけるゝ大雨久ゝくゝ降続く。陣中み
ゝ泥の中ゝ居ざゝー。前ち山へ陣を移ゝして。まべらく晴
を待ゝ司馬懿いかりて曰く。我されをまるまでまち公孫
淵を生捉ことを目の前ゝあり。安んぞ今陣を移さん必を
無用ちる舌を揺して。諸軍のゝを迷へむるとおゝ重
て陣を移さんとのゝものあらべ必ず首を斬んと触なり
ける。そのち右都督仇連きたり。味方の軍勢水を患ひて
みる陣を移さんことを願ひと告けるゝ司馬懿勃然
として怒て曰く。我已ゝ令を出さ糸ゝ汝おゝとて法をお
うせるぞとく。刀出して仇連ゞ首を刎轅門ゝ梟させけ
れゞ諸軍震怕まどく。再び移さんとのゝものゝー是ゝ於
て司馬懿南の陣を二十里ゝまりぞけ。態と曰るくと攻
て城の内乃者ども皆外ゝ出て牛馬を牧柴薪を取せ

けるに司馬陣理といふ
反せしとた上庸の城を攻るよ兵を八路よ分さ道を
そぎ卒よ孟達を生捉ものより今味方の勢四方もろ〳〵叢
千里を来さ却さゆるくしと攻るよへ如何さる史ぞ願へ教へ
史司馬懿笑ひて曰く汝へ司馬の官よ居して兵法をきう
ざ昔孟達へ上庸の城よ竈さ兵粮一年の貯ありて兵へ
小勢ちり其とた我勢ハ敵よ四倍して却て兵粮へ月の
用意も寄我一月の兵粮をもりて敵の一年の兵粮よ對
せば安んぞ久〳〵戦てを得ん四倍の兵をもりて敵の小
勢を攻べ勝ざとのよてある史らば是故よ夜を日よ継ぎ
きうよ攻させ卒よ孟達を擒よせり今遼東の勢もちく是

城よ指箠さく味方の勢へをあへご寡し敵へ兵粮よ乏しくく味方
へ兵粮よ飽足り此史よ日を送るよ志たゞけて城の中兵粮う
詰り必ざ南門より走るざしそのとき勢ひなのけて之さ攻べ
勝ざとのよてある史らば我よのよ緩くと攻させ南の攻
口を二十里退けたり是敵を走らしめん為もう兵法うも
兵者詭道也戦者逆道也善因事変とのより敵へ多兵粮
よ乏しくとも味方の勢の水中よあるを特として未手
を東さ降人よ出ざ我よのよ無能の事をもりて敵のん
を安らしむ今もし小利を貪りく城を攻べ敵さあらば命
をもてく戦べし只軍を休くく敵の兵粮よ詰るを伺ひ今十日
の内よ天気さるらば晴べし其とた力を尽して攻破らんとう

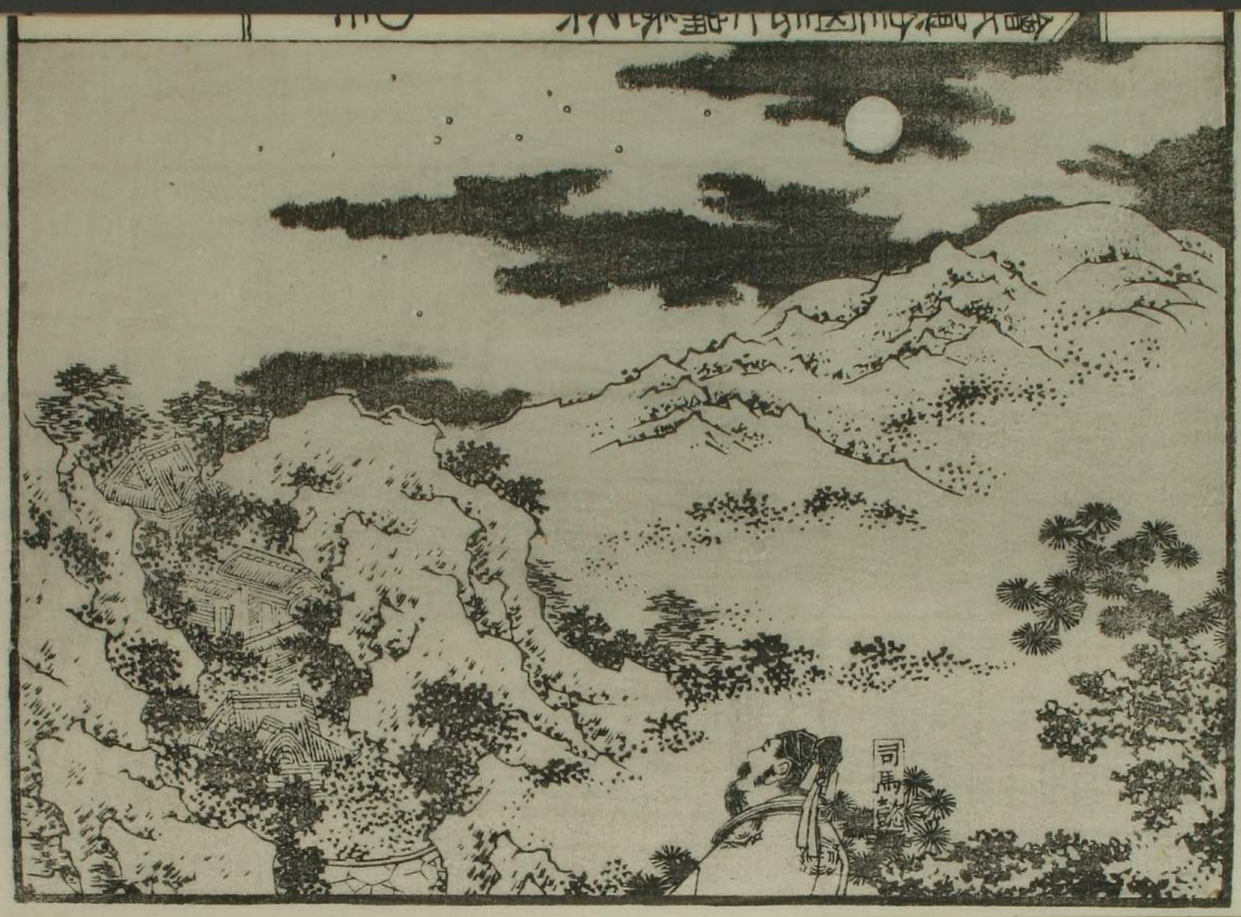
なりけれべ。諸將こゝを再拜して是真の神武の筭ちうと感服せ。司馬懿をあぢち。洛陽へ人を上せて。兵粮を催促しけれべ。群臣みな奏して曰く。近ごろ秋雨降続く。一月やまべ人馬尽く疲れ苦む。早く詔を下して。司馬懿を都へ召回しのべべ。曹叡が曰く。司馬懿よく兵を用ひて。危を臨んで変を制せ。必べ深き計あらん。朕近き内ゝあらべ。公孫淵が首をこゝろべ。汝ぶ患るとなかれとて。修しく兵粮を下しける。司馬懿べ戦ひを休ゝ雨の晴を待ゝ。夜日の内ゝ天気果して晴ゝけり。其夜外ゝ出ゝ。天文をこゝろるゝ。二の星を。その大さ斗のごく。光燄丈ゝ流れて。首山の東北より。襄平の東南の方へ落けれべ。諸人をあ大ゝおどろく。司馬懿笑ひて曰く。五日の内ゝ。この星の落たる和ゝさく。あらべ。公孫淵を打取べし。明日力を併せ一攻せよとて。夜とでゝ明けれべ四方の寄手。相近ひて。哭て造り。山を築ゝ。雲の梯を造り。鉄砲を飛し石を投うけ。地て掘ゝく。攻入けるべ。城中の勢ゝを先途と拒ぎけれども。兵粮已ゝ尽けるべ。牛馬を殺して朝夕を送る。斯さいへ始終へぐと。淺ましきものありて。常ゝ公孫淵を殺さんと覗ひけれべ。日夜心を安んぜで。相國王建。御史柳甫二人を矢倉の上より。縄をもつて。城外へ縛下しに。淵の陣ゝ行ゝ降参を望ゝむ。二人司馬懿ゝ前ゝ再拝し。太尉私がべくゝ四方の囲を解て。二十里まりぞきの人ゝ尽く城を開て降らんとひまるれべ司馬

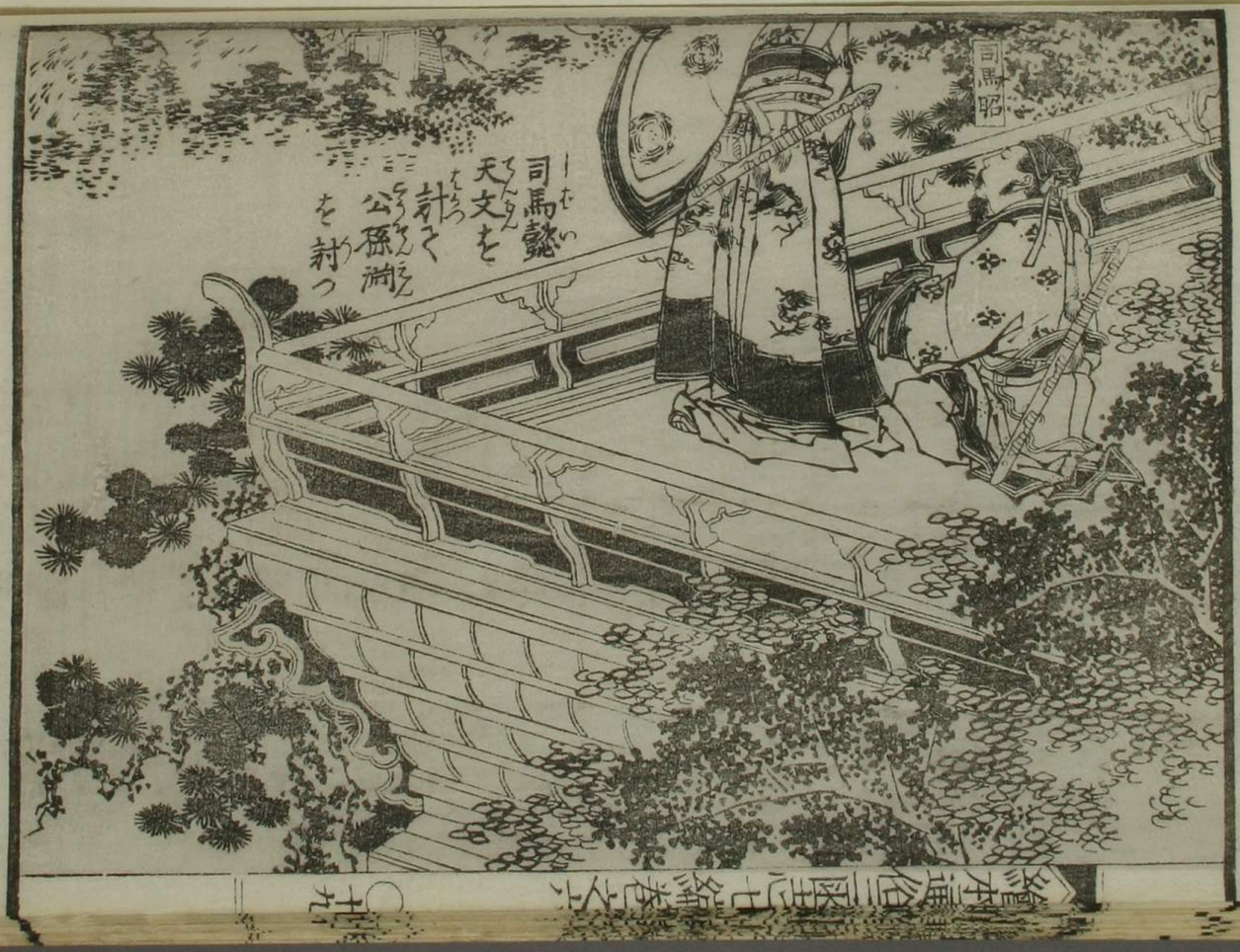
懿大ゐに怒り。沒いらあるべく輕くして来りて。我れて欺くぞとて。
刃を出して二人の首を切。その從者ゐ與へ。撥丈を添へ回し。
けるゐ孫淵が由を文へくいよく駭き自ら撥丈を拔きこ
ゐその文ゐ曰く
魏征西大都督大尉司馬公撥下ゐ公孫淵一切謂楚鄭ゐ國
而鄭伯猶肉袒牽羊迎之孤乃天子上公而建甫等欲
孤解囲退舍豈得無礼耶二人老至傳言先指已被
吾斬之若意有未已可便少年有明決者來稍有誓
遲粮皆誅戮故機
ゐ孫淵が文を見へ怕ぢおのき。如何せんと錢しけれべ侍中
衛演が曰く。某祢ゐへ行んゐ公孫淵よくく云含めて。魏の
陣ゐ遣しけるべ司馬懿が文を見へて。諸大將を華ゐ出
立せさ。中軍ゐ排列せしゐ其後ゐよびへ入るゐ衛演脇
行肘歩して。帳下ゐ拜伏しゐ跪ひてやけるへ希くへ大尉雷
霆の怒を息め虎狼の威を靜めて。某ホゞ降參を許しの先
その子公孫修を半して質とし。君臣ゐ自縛して降るべし。
司馬懿が曰く。凡そ軍をもるゐ大法五あり。能戰ものへ戰ひ。
戰ひ能ざるものへ守る。守ること能ざるものへ走る。走ること能
ざるものへ降る。降ること能ざるものへ死を汝ホ出さく降ると
能ざんべ當ゐ死をべし。我人質を取く何の用ゐせん早く
頸て洗さく力を受よとさく逐立さく回しけれべ衛演頭をく
へ鼠の逃るゞごとくゐ馳回り。ゐ孫淵ゐ告けるべゐ孫淵膽を

冷ー。其子公孫修と千余騎を引具ー。其夜の三更ゑ南門より出さく東南の方へ走りけるゑ敵一人もえざりしぐん。安んど行こと十里ばかりゑて忽然ーとして山の上ゑ鉄砲ひびき。鼓の声地を動ーさく。一手の勢路を遮り。司馬懿中央ゑ馬を躍せ。司馬師。司馬昭と左右ゑそなえ。又賊ぐんぐへろ迸るとよ。ぶくりけるゑ公孫淵驚て冷ー。引回して迸んとするゑ。合図の火の手をあげて。魏の先鋒胡遵まっさきゑ討て掛り左ゑ夏侯覇。夏侯威右ゑ張虎。樂綝十方より打囲ぐ。鉄桶のごくちりーぐゑ公孫淵父子と共ゑ地ゑ跪ひて降参をこう。司馬懿大ゑ笑ひ諸将ゑむかへて曰ける。先ゑ丙寅の日此所へ星落こりーぐ今夜壬申ゑ相應ぜりとて。卒ゑ二人の首を刎させ。直ちゑ襄平の城ゑ入らんとされば先鋒胡遵ぞ。でゑ城を打破り。國中の人民香を焼て生むりゑ司馬懿城中ゑ入さく。公孫淵が一族官僚七十余人を斬殺ー。榜を出して民を安んど。賈範倫直ぶ。公孫淵と。燐ゑこ二人の墓を封ど。其子孫ゑ恩賞ー。國中已ゑ治ーるべ兵を収めて洛陽へ回りけり。

仲達謀殺曹爽

景初三年の正月ゑ魏主曹叡。許昌の殿中ゑありける。或夜の三更ゑ一陣の旋風吹起りさく。側ある燈を打滅ぐくともなく哭哀音ーて。先年殺されー。毛皇后。牟十人の宮女を伴ひ来り。座辺ゑよりて命を索む此ようちのき病をなて一身安ら


司馬昭


司馬昭
司馬懿
天文を
計て
公孫淵を
討つ

らば。日々を以て危くちう[illegible]劉放孫資二人を樞密院の事
務を掌せ武帝の子。燕王曹宇を大将軍に任じて太子曹
芳を輔[illegible]めんとす。曹宇へ生れ[illegible]恭儉温和[illegible]て堅く辞[illegible]
やまず。曹叡これをあやぶ。劉放孫資と。誰を用ひんと議をる
に。二人ともに曹真が恩を受たり[illegible]其子を勧め為に荅
てやけるに燕王みづから才浅をまうさく。此職を辞を別う
才ある人を択べ。曹叡問て曰く。朕が宗族の内た[illegible]人をも用
ひざるに二人荅て曰く。曹宇と本國へ追返[illegible]曹爽を大将軍として。
是よまさるべし曹真の子曹爽の職に任ずべし。曹叡
朝廷の政を総摂[illegible]使を馳て司馬懿をめす此とを司馬
懿いたり遼東を平げて。都をさして回りけるが途にて血尊

てきて。急ぎ許昌に来りて。曹叡が見ん曹叡が曰く。朕死を忍
で。卿が回るを待今已に逢事をえたり。司馬懿頓首して曰く。臣途中にて
とて承りぬ。急ぎ[illegible]幸に龍顔を拝をうとをえたり。曹叡をあはれ
子曹芳。大将軍曹爽。侍中劉放孫資ホを床の前に召寄
みづから。司馬懿が手を執てやけるに。昔蜀の劉先主白
帝城にて。太子劉禅を孔明に託せしも
これよりて。孔明忠誠を尽し。命を弃て孤子を扶く偏
邦の人臣ぞや。中國をや。朕が孤子曹芳を
年まだ八歳ちう。社稷を理むることをえん。ねがはく

大尉。あらびを宗兄ちよび。元勲の旧臣。伊尹周公の忠を效
ひて。共を孤子を扶べ宗廟生霊の大幸ちうりとて。太子曹
芳と近くやーよせ。司馬仲達へ朕と違こあーへ今より後必
ず重く敬へといよく。司馬懿を命ドて。曹芳を抱ーむれべ。
曹芳をあち。司馬懿が頸よとう付く。手を放ぜ曹叡されを
己て涙と流ー。太尉よく今日の事をおもひ必ぜ誤るてと勿れと。
云けれべ司馬懿頓首ーて涕泣と曹叡を辞ーご言てあと。
いなど。唯手をとりて太子を指ー。須臾ーて命終。在位十三
年壽三十六歳とぞ。景初三年正月下旬ちう。此を於て曹
爽。司馬懿。まづ曹芳と帝位を即ーぬ曹叡を高平陵を。
葬く。明帝と謚ー。郭皇后を皇太后と尊号ーく。正
始元年と改め。二人内外の政事を摂く。曹爽。殊を司馬懿
を敬て父のごー。曹爽字い昭伯。故大将軍曹真が子は
て。乃ち魏主の至親ちう。始め門下の賓客五百余人あり。
その内五人いとお。浮華諂佞のものあるーぺべ明帝世をあるー
間い遠けて用ひざりけるが。今政事を摂ひ至りて。又尽く諂ひ
事てその五人とらの。何晏字い平叔。鄧颺字い玄茂。李勝字を
公昭下。益字い彦靜。畢軌字い昭先ちう。其外太司農桓範字い
元則とらよりの。媚を成く。何りに従ひ共を巧言令色てりく。
已が富貴と得んと料る。何晏あると。曹爽を告てやけるへ。
軍兵を統司るの大権も。他人を托ーものべ後るおらべ禍
あらん。曹爽が曰く。我と軍中の大事と統司るものへ仲達

る。此人ハ先帝孤子を托ーめ
ん志のびん。何晏ガ曰く。將軍ハ知ーの召ぬとも自ら
御父曹真ハ仲達と共ニ蜀の敵を破ヌと云長安ニ生ひ
しニ仲達志ありニ恥を與ニ。気を病ーわけるニより。ニ
陣中ニさ逝去ーの之り。今將軍おんでこれを察ーるなり。
曹爽げニもと省てされよう。仲達を退けんとて計り或日
魏主曹芳ニさゝやけるハ司馬仲達久く先朝より事へ
て。功高く徳重ー宜く太傅の位ニ昇せのべーと曹芳幼
少ーて。自ら主張をるて能ざる宜く料ひる人と云けれバ曹
爽ニ告ぐ。司馬懿を太傅ニ進ぐ。天下の兵馬尽く我一
人の下知ニ従へむ。是ニより弟の曹義を中領軍と〳〵
曹訓を武衛將軍と〳〵曹彦を散騎常侍侍讀と〳〵。兄
弟三人御林の軍馬を統督ーれーひゆ〳〵禁宮ニ出入と。又
何晏鄧颺丁謐を尚書とし。軍軌を司隷校尉と〳〵李勝を
河南の尹として。此五人常ニ曹
四方の名士まねて門下ニ投ぢるもの数を知ら。司馬懿ハ是
黨逆をきらく虚病ーさ朝ニ出ざ。二人の子も職を辞ーさ
外ニ出ず時を待ぐ計をおきん
ゐちく奢ニ長ぢ毎日何晏ホと
皿ニお朝廷とひさ〳〵玩好珍奇の物も魏主ニ献らぢて。
已が家ニ貯へ。佳人美女を択んぐ府院ニあつめ黄門官張
當とのみのて語ひけれバ張當。諂ひ阿りて私ニ先帝の侍

妾七八人て択んで曹奥が家へ送り。良家の美女五六十人て家樂そ。重樓畫閣を建金銀の器皿を造り其榮耀きわめてとゝのへて何晏あるとて昔日神ト管輅と云もの深く易の理を明らかに人の吉凶をトひしと語けれバ鄧颺何晏等ハ我毎夜こゝにきたる夢をこそ幸ひトいゝ合て。いてぎ管輅を迎ひよせ我毎夜枚十疋の青蠅とび来て。臭の上へ落ると夢を見る。吉凶をトひ給へと云けれバ何晏も。やけるに我ホゞ相ひ三公とたつとき人物たりや願ハトひ見給へ管輅暫く輔けて。慈恵を宣周公周を佐けさ。坐ろく且を待給へのゆへ光を六合へ流さ万國をお寧ー。是をあなち道を履の休祥たり豈筮をもりてトとを用ひんや。今二公その身侯位を居ーと。職山岳よりも重名雷霆の震ぶごとく。徳を懐ものハ寡く。威を怕るゝものハ衆し殆心てふるとゝ。翼たる多福の人もあらバ況や鼻ハ天中の山高ーく危らバ長く貴を守る所以たり。今青蠅悪臭ものへ顛り。軽豪たる者へ位峻ものへ顛り。軽豪たる者へ亡ぶ害盈の衰盛衰の期。おのがごんべある乏らバ此の人ぐり山地中ありと雖ども謙とへひ雷天中にあるを壮とり人猶いまを損し。寡を益ー。壮い礼をあらざんべ行ことあれ未ハ有損已而不先大行非而不傷賊者ハ。下へ尼父彖象の義をおのれの人然とそへ三公の位ともほゐて青蠅近尽ときゝーと憚る和ちくやけれバ鄧颺勃然とーていう

乃て曰く是老生の常談ちう。管輅も二人が用ひざるをこそ。
老生い不生をこそ。常談をえると罵り袖を拂て回り行
れば何晏鄧颺大ひに笑ひて。是まことに狂人ちうとぞやける。管
輅い家へ回りて。その場の趣きを語ければ舅おどろひてす
ける。何晏鄧颺い威勢をおそれおのゝ盛ふして。天下の人尽く怕れざ
るものぞ。汝ごとき人は無用の言を出すべく。二人の言は逆たるぞ。管
輅が曰く。我死人と詔る。何ぞさまでも怕るゝとあらん。舅駭
ひて曰く。死人とい何事ぞ。管輅が曰く。我鄧颺をえる。行歩筋
不束骨脉不制肉起立傾倚して。手足おき人のごとくをなさず。
思慮の相と号を何晏い竟一不守宅血不藥色精爽烟浮
みて。其容枯木のごとく是を兇徴の相と名く。共ひに遐福の人

ひあらざる。近き内ひ粉骨砕身せられど。累ひあらざる三族ひ及ぶべし。
我ひの故ひ怕ひざるとと云けるべ聞人おゐ大ひ笑ひ狂人ものうと
て朝りより後ひそちの人合されたり。曹爽い何晏等と日夜
酒を飲ぎ遊びけるが。気鬱ぎ煩ぎて。常ひ城外ひ
出ざ獵をおを。その弟曹義ひ是を諫め兄ひの毎日遊宴を
のみ事とぎ威勢をもて天下の人を怕ぢむ長久のそ
うりえを有ざ。況ん城外ひ出ざ獵をぎる方一害と計
ものあらそ。城内ひ変あらば後悔をとも及ぶべからずと云けれ
べ曹爽怒りて曰く。兵権尽く我手の内ひあり。誰う害を計
ものあらん無用の言をも。ものの哉と気色を損じて叱り
けるべ曹義涙を流ぎて退きけり。何晏ある日曹爽ひ見

司馬懿偽病して李勝を訪る

て。今司馬仲達病と号して久しく坐せず。君あんぞ久しく坐せず。君あんぞ付て。虚実を伺ひみざるといふべし。曹爽笑ひて曰く。老夫ちんで道を足んとぞやける。其のち正始十年改めて嘉平と号し。李勝を荊刕の刺史と封ず。曹爽より内外の権をとり。久しく仲達が消息をきろざりしそ病の虚実をさぐらん為なり。ひそかに李勝を呼び計を教へ汝刺史となりて。荊刕へ趣き仕乞して。彼が病の体をよく太傅の府中へ到る。門吏まづその由を報じければ。司馬懿ひそかに二人の子とよんで曰く。是れ曹爽。必ず病を探らん為なり。我又計をなさんとて急ぎ冠を卸ず髪を乱し。床の上へ伏す。身へ被をまとひ二人の女へ扶け抱られ。李勝をよびいれ対面す。李勝床の前へ再拝して久しく太傅へ見ゆるとのたまふ。不料も此のごとく衰へたるを。封じ帰り。此由人へ御聞に入べしとて。暇乞をやさんとて。并刕の刺史へ封じのぞみける。司馬懿詐りて答へて曰く。荊刕へ遠き所なり必ず油断なく守の人李勝が曰く。并刕へ近きにあらず。并刕よりきなまるう。李勝が曰く。漢上の荊刕ちう。司馬懿笑ひて曰く。御辺荊刕より来まるう。李勝が曰く。太傅の病あやとて此のごとくある左右の人咎て曰く。太傅近比耳聾て久しく眼さへ霧ふさがりたるを。李勝をあなどりて笑ひて曰く。我司馬懿なるを求め書付くれんせけれども司馬懿なるを

病と犯さゞて耳のめでたく健だ御辺判及ぶに到らざる務めて力を立てその身を保重せよといよく手をあげて口を教ゆるに侍婢をおそち湯を進む司馬懿これを飲で湯流れて襟を濕ければ李勝笑ひて曰く諸人をお太傅の旧風発ぬと云ふ。今果して此のごとし司馬懿乃ち哽噎の声をなし我老衰して病おもく死をるて旦暮にあり二人の子不肖ぢり。御辺よく教導きの。曹将軍の見られべ千万二人の子を頼たる由傳さるのみれといよて床の上に倒れ伏し声嗽ひ気喘ぐ。李勝拝し別るさ曹爽ぶ府中に到り右のむきて告けるに曹爽大に喜んでさの老父お残餘気あり。形色とでも離る乃ち泉下の人ならん我おんの慮うあらんとでやける司馬懿。李勝が回りたるをこんて起上り。二人の子に向ひてやける李勝ぶ病のやうを語らば曹爽ホ再び我を疑ふ。唯何みても彼ホぶ城外に出て獵をまを乱とをきうに計を施さんとてひそかに用意して待居たり。

繪本通俗三國志七編卷之六終